

影法師

豊島与志雄

青空文庫

うしろに山をひかえ前に広々とした平野をひかえてる、低いなだらかな丘の上に、小さな村がありました。村の東の端はしに、村一番の長ちようじや者の屋敷やしきがありまして、その堀へいの外の広場は、子供たちの遊び場所でした。

白く塗った土堀どべい、左手はゆるやかな山すそで、いろんな灌木かんぼくや草がはえています。前には小さな川が流れていて、魚が泳いでいます。川の向こうと右手の方には、たんぼが続いています。子供たちはその広場でおもしろく遊ぶことが出来ました。

晴れた日の朝早く、長者の子供を交まじえて三四人の子供が、いつものように、そこで遊んでいました。東の地平線から出たばかりの太陽の光りが、皆の影を白い壁にくつきりとうつしていました。その影があまりはつきりしておもしろいので、皆は影うつしの遊びを始めました。

「ああ、いいことを考えた」と長者の子供がふいに叫びました。

「待つといでよ、じきに来るから」

そして長ちようじゃ者の子供はいきなり駆け出して、うちの中にはいって行きました。

お祖父じいさんが、大きなまんまるい眼鏡めがねをかけて、縁えんがわ側で本を
読んでいました。

「お祖父さん、僕にあの……東の塀へいを下さいよ」と子供は言いま
した。

お祖父さんは、まんまるい眼鏡の下にびっくりした眼を開いて、
子供を見ました。

「なに、塀をくれって……」

「ええ、下さいよ。おもしろいことがあるんです。こわしやしま
せん。ただ遊ぶだけなんです。塀で遊ぶんです。ね、いいでしょ
う」

「塀で遊ぶって……おかしなことを言う子だね。こわしさえしな
ければよいけれど……」

「じゃあ下さいね。遊ぶだけなんですから」

そして子供はもうお祖父さんの側から駆け出して、部屋の中にはいって、大きな硯箱すずりばこを持ち出して、またもとの塀の外に駆けってきました。

「何をするの」

待ってた子供たちが集まってきました。

「今ね、この塀をお祖父さんからもらってきたんだ。だから、こわしさえしなけりや、何をしたって叱しかられやしないよ……これから皆の影法師かげぼうしを、この塀の上に写し取るんだよ」

「影法師を写し取る……うん、おもしろいな」

皆はわーっと声を立てておもしろがりました。そしてすぐにそのしたくにかかりました。小川の水を硯にくみ取って、一生懸命

に墨すみをすりしました。早くしないと、太陽が昇あってしまいます。太陽が昇あってしまったら、影法師かげぼうしは小さくなつてだめなんです。

「僕が考えたんだから、僕が先だよ」

そう言つて長者の子供は、白い堀ほりの前につつ立ちました。その姿通りの影が、白堀しろほりの上にはつきりうつりました。それを他の子供たちが、墨すみをいっぱいふくましました筆で写し取りました。

「影法師なんだから、すっかり真っ黒に塗らなければいけないよ」
そして皆は影法師の形を真っ黒に塗り始めました。硯すずりの水がなくなる、また小川の水を汲くんできて墨をすりしました。

そのうちに、太陽はずんずん昇あつていって、堀にうつる影法師は小さな不格好なものになりましたので、長者の子供一人のだけ

で、他のは写し取れませんでした。

「また明日の朝にしよう」

二

毎日晴れた日が続きました。子供たちは朝早くから白塀の前に集まって、かわるがわる影法師を写し取りました。

そのことをおもしろがって、他の子供たちも集まって来ました。そして太陽が出たばかりの頃、日に二つか三つずつ影法師を写し取りましたが、日がたつにつれて、塀いっぱいたくさんになつてきました。高いのや低いのや、肥ふとったのややせたのが、皆まつす

ぐを向いてずらりと並びました。墨でまつ黒に塗った影法師かげぼうしですから、太陽がいくら高く昇つても、太陽が沈んで晩になつても、ちようど人がつつ立つてるように、そこに、白い堀へいの上に、つつ立つています。

それを見て、通りがかりの大人おとなたちは、「えらいことを始めたな」と言いながら、にこにこ笑っていました。長者のうちのお祖じ父いさんも出て来て、大きなまんまるい眼鏡めがねの下に眼をまんまるくして、「ほほう」と感心したように眺め入りました。

「これが僕んですよ」

「これが僕んですよ」

子供たちはめいめいそう言って、自分の影法師の前に立つてみ

せました。背の高さから形まで、からだ身体どおりの影法師でした。

さて皆の影法師が写し取られて、塀いっぱい並びますと、これからどうしようかと、子供たちは考えました。写し取っただけではいっつこうつまりません。

「影法師が塀からぬけ出して踊ってくれるといいんだがなあ」

そう皆は考えました。そしていつも塀の前に集まっては、何度もくり返して考えました。しかしそんなことが出来るわけはありません。

ところが、ある日、皆がやはりそこに集まって、同じことをそこそ話し合っていますと、いつのまにどこからやって来たか、髪みなの長い見馴れない男が、そばにつっ立って笑っています。

「君たちはばかなことを考えてるね」

そしてやはり、塀の影法師を見て笑っています。

子供たちはそれがしやくにさわりました。髪の毛長い見馴れないみな変な男ですけれど、それもかまわずに、皆でつめよつていきました。

「何を言ってるんだい。何がばかなことなんだい。影法師かげぼうしを踊らせようとするのが、何がばかなことなんだい。おもしろいことじゃないか」

見馴れない男は、さも愉快ゆかいそうに、はっはっ……と笑いました。そして言いました。

「なるほど、私が悪かった。それはおもしろいことに違いない。」

……それでは一つ私が教えてやろうか。その影法師を踊らせることを、教えてやろうか」

「え、おじさんはそんなことを知ってるの。教えて下さい。ね、教えて下さい」

「じゃあ教えてやろう。そのかわり、私の影も一つ、そこに写し取ってくれなくてはいけない。そして、明日の朝早くここに来れば、君たちの影法師は踊れるようになってるだろう」

子供たちは大変喜びました。そして堀へいの片隅かたすみの空あいてるところに、見馴れぬ男の影法師を写し取りました。もう太陽が高く昇っていましたので、男の影法師は低くびしやんこになって、おかしな格好でした。

「だめだよ、日が高くなってるから……。おかしいな」

「いや、それで結構だ」

そして男は、自分の変な影法師を見て、はっはっは……。と笑いました。

「それでは、明日の朝早く皆でそろっておいでよ」

男はそう言いすてて、どこかへ行つてしまいました。

三

子供たちはその晩、おちついて眠れませんでした。自分たちの
すみえ 墨絵の影法師が、堀かげぼうしからぬけ出して踊りはねるといふんですか

ら、待ちきれませんでした。翌朝は早くから眼をさまして、皆誘い合わせました。大人たちおとなが何かたずねても、今にびつくりさしてやるという気持ちで、まじめくさった顔をして黙っていました。やがて皆そろいましたので、胸をどきどきさせながら、長者の屋敷やしきの東の白堀しろべいのところへやって行きました。

ところが、一目ひとめ見ると、皆はあつと口の中で叫んだまま、おどろいて立ち止まりました。皆のおもしろい影法師がいっぱい立ち並んでいた白堀は、一面に何かでまっ黒に塗られてしまって、そのまっ黒な色がまたひどく濃こくて、いわば闇の鏡みたいになっているのです。影法師どころか何一つ見えないで、ただ一面にまっ黒なだけです。

「はっはっはっは……」

高い笑い声がしたので振り向くと、昨日の男がそこに立って笑っています。

「私のあのおかしな影がね、一晩のうちに大きくなって、堀いっばいにひろがったのだ。とんだことになってしまった」

それを聞くと、子供たちは急に怒りました。その男がだまかしたのだ。嘘を言ってるんだ。影法師が一晩のうちに堀へいいっばいに大きくなるなんて、そんなことがあるものか。その男が堀へいまっ黒に塗りつぶして、皆の影法師かげぼうしをなくしてしまっただのだ。

「嘘つき、嘘つき。僕たちをだまかしたんだな」

そう言って子供たちはつめよっていきました。

「はっはっはっ……」と男は平気でなお笑っています。

「人をばかにしてる。なぐつちまえ」

気の早い子供たちは、棒ぎれを拾ったり、石をつかんだり、げんこを握りしめたりして、男へ向かっていきました。男は笑いながら、あちこちへ身をかわしました。ひどくすばしこい影のような男で、大勢おおぜいでいくら追っかけても、つかまえることが出来ませんでした。

「君たちはばかだな」と男は広場の中を逃げ廻りながら言いました。「そら、まっ黒な塀の中で、影法師が踊ってるじゃないか」

そう言われてから皆は初めて気づきました。東から出た太陽の光を受けて、黒い鏡のように光っている塀の中に、皆の影法師が

浮き出していました。白堀しろべいにうつったのとちがつて、奥深いま
つ暗な中にうつってるものですから、そうはつきりはしていませ
んが、すかして見ると、ちようど生きた人間のように浮き出して
います。それが、皆が動くにつれてあちこちへ動き廻つて、大おおぜ
勢いの本当の子供たちが踊つてるようなんです。

「おや、これはおもしろいや。ふしぎだなあ」

皆は黒堀くろべいの鏡に影法師をうつして、ふしぎそうにのぞきこみ
ました。眼や口や鼻までそっくり見えて、向こうにも同じ生きた
子供たちがいるようなんです。

「わかつたかね、はっはっは……」

皆が振り返つてみると、髪の長い見馴みなれぬ男は、なお笑いなが

ら立ち去って行きました。引き止めるまも何もなく、まるで宙を飛ぶようにして、山の方へ見えなくなつてしまいました。子供たちはあつけにとられました。

そこへ、長者のうちのお祖父じいさんが出て来ました。子供たちは昨日からの話をしました。お祖父さんはびつくりしたように、まつ黒な堀へいを見ていましたが、しまいに言いました。

「それはきつと、大変えらい人にちがいない。お前達はよいことを教わつたものだ」

子供たちはさつぱりわけがわかりませんでした。けれど黒堀くろべいの鏡が出来たのはうれしいことでした。朝日のさしてる時ばかりでなく、午後になつても、月が出てれば夜分やぶんでも、黒堀の鏡は皆

の姿をうつし出してくれました。それもただの影法師かげほうしではなく、
生きた人間と同じ姿なんです。

皆はいろんな姿をうつして、自分も踊り影の姿も踊らして、い
つも大変愉快に元気に遊びました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

影法師

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>